

令和七年度 入学者選抜学力検査問題

国 語

注 意 事 項

- 一 試験開始の合図があるまで、問題冊子及び解答用紙の中を見てはいけません。
- 二 解答用紙は三枚あります。
- 三 試験中に問題冊子の印刷不鮮明、ページの落丁・乱丁及び解答用紙の枚数の過不足や汚れ等気がついた場合は、手を挙げて監督者に知らせてください。
- 四 試験開始後、すべての解答用紙に受験番号、志望学部及び氏名を記入してください。  
受験番号の記入欄は各解答用紙に二箇所あります。
- 五 解答はすべて解答用紙の指定された解答欄に記入してください。
- 六 問題冊子の余白は適宜使用してください。
- 七 各問題の配点は二百点満点としたときのものです。
- 八 設問の都合で、空欄を設けたり、傍線を引いた箇所があります。
- 九 試験終了後、問題冊子は持ち帰ってください。

< 著作権保護の観点から掲載しておりません。 >

— 次の文章は、一九八八年に世界思想社より出版された『生きられる文化の社会学』（仲村祥一）の一部である。この文章を読んで、以下の問いに答えなさい。  
い。（配点80）

< 著作権保護の観点から掲載しておりません。 >

(注)

- 1 柳田——柳田國男。日本の民俗学者。
- 2 ソンタグ——スーザン・ソンタグ。アメリカの作家、映画製作者、社会運動家。
- 3 インディビジュアル——独特の、特有の。
- 4 ゴードンシュミット——サミュエル・ゴーズミットを指す。アメリカの物理学者。

< 著作権保護の観点から掲載しておりません。 >

5 池田満寿夫——日本の芸術家。

6 マススペクトル法——質量分析法。

7 コレクションナー——収集家。

8 ジャン・コクトー——フランスの芸術家。

9 ピカソ——パブロ・ピカソ。スペイン出身の画家。

10 フェイク——偽物。まやかし物。

11 G・ノーマン——ジェラルディン・ノーマン。イギリスのアートジャーナリスト。

12 キーティング——トム・キーティング。イギリスの絵画修復家。

13 大家へのルサンチマンからの偽作者(松本清張『真贋の森』)——ルサンチマンとは、怨恨、遺恨のこと。松本清張は、日本の小説家。『真贋の森』は、若き日に恩師の怒りにふれ学界を追われた主人公が、恩師に取り入って大学教授となったかつての同期に対する恨みから、贋作画の製作に激しい情熱を燃やすという物語。

14 エヒト——ドイツ語の echt。本物の、真正の。

15 ジンメル——ゲオルク・ジンメル。ドイツの哲学者、社会学者。

16 ミメーシス——芸術における模倣。

問一 傍線部①～⑥について、漢字はひらがなに、カタカナは漢字に直しなさい。

問二 波線部 a「甲乙つけがたい」、b「底の割れる」、c「私利にかまけ」の意味をそれぞれ簡潔に書きなさい。

問三 空欄 X、Y に入る言葉として最も適当なものを、それぞれ次の I 群・II 群の中から一つずつ選び、記号で答えなさい。

|          |      |      |      |      |      |
|----------|------|------|------|------|------|
| X:【I 群】  | ア 喪失 | イ 本質 | ウ 否定 | エ 架空 | オ 過去 |
| Y:【II 群】 | ア 是  | イ 生  | ウ 原  | エ 動  | オ 実  |

問四 傍線部A「原物志向、既成崇拜」とあるが、これはどのような考え方か。本文中の言葉を使って、五十字以内で説明しなさい。

問五 傍線部B「それはまた「ウソらしいウソ」の一つの形である」とあるが、これはどのような意味か。絵画の贋作の例をもとに、最も適切なものを次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 「写す」ウソは、原作者の描かなかった作品を推察・想像し、作られた写しを生み出すという点で、「作る」ウソと同様である。
- イ 「作る」ウソは、原作者の描かなかった作品を推察・想像し、作られた写しを生み出すという点で、「写す」ウソと同様である。
- ウ 「写す」ウソは、原物に似せたコピーを原物だと言い張り、原物になり代わらせようとするという点で、「作る」ウソと同様である。
- エ 「作る」ウソは、原物に似せたコピーを原物だと言い張り、原物になり代わらせようとするという点で、「写す」ウソと同様である。

問六 空欄 Z に入る言葉として最も適切なものを、次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 原物と適切な距離を確保し、自らが可能な限り原物に近づこうとする
- イ 原物とは異なることを自覚し、自らが原物とは別次元のものになろうとする
- ウ 原物との境界をいかし、自らが原物を超えようとする
- エ 原物を単に模倣するのではなく、それを生み出す技術を発展させようとする
- オ 原物とのあいだの距離を無にし、自らが原物になろうとする

問七 傍線部C「自己の本物性を実現してゆく」とあるが、贋作において自己の本物性を実現してゆくとはどういうことか。百字以内で説明しなさい。

二 次の文章は『大鏡』の一節である。これを読んで、後の問いに答えなさい。(配点70)

また、ついでなきことにははべれど、怪と人の申すことどもの、させることなくてやみにしは、<sup>(注1)</sup> 前の一条院の御即位の日、大極殿の御装束すとて人々集まりたるに、高御座のうちに、髪つきたるものの頭の、血うちつきたるを見つけたりける、あさましく、<sup>(注2)</sup> いかがすべきと行事思ひあつかひて、かばかりのことを隠すべきかとて、大入道殿に、<sup>(注3)</sup> 「かかることなむさぶらふ」と、<sup>(注4)</sup> なにがしのぬして申させけるを、いと眠たげなる御気色にもてなさせたまひて、ものも仰せられねば、もし聞こし召さぬにやとて、また御気色たまはれど、うち眠らせたまひて、なほ御いらへなし。いとあやしく、<sup>(注5)</sup> さまざま大殿籠り入りたりとは見えさせたまはぬに、<sup>(注6)</sup> いかねばかくてはおはしますぞと思ひて、とばかり御前にさぶらふにぞ、<sup>(注7)</sup> うちおどろかせたまふさまにて、「御装束は果てぬるにや」と仰せらるるに、<sup>(注8)</sup> 聞かせたまはぬやうにてあらむと、思し召しけるにこそと心得て、立ちたうびける。げにかばかりの祝の御こと、また今日になりてとまらむも、いまいましきに、やをらひき隠してあるべかりけることを、心肝なく申すかなと、<sup>(注9)</sup> いかにも思し召しつらむと、後にぞ、かの殿もいみじう悔いたまひける。さることなりかしな。されば、なでふことかはおはします、よきことにこそありけれ。<sup>(注10)</sup>

また、大宮のいまだ幼くおはしましける時、<sup>(注11)</sup> 北の政所具したてまつらせたまひて、春日にまゐらせたまひけるに、御前のものどものまゐらせ据ゑたりけるを、<sup>(注12)</sup> にはかに辻風の吹き纏ひて、東大寺の大仏殿の御前に落したりけるを、春日の御前なるものの、源氏の氏寺に取られたるは、よからぬことや。これをも、その折、世人申ししかど、<sup>(注13)</sup> ながく御末つがせたまふは、吉相にこそはありけれ、とぞおぼえはべるな。夢も現も、「これはよきこと」と人申せど、<sup>(注14)</sup> させることなくてやむやうはべり。また、かやうに怪だちて見たまへ聞こゆることも、かくよきこともさぶらふな。

『大鏡』道長(雑々物語)「より」

(注)

- 1 ついでなきこと——順序があるわけではないこと。突然の話題。
- 2 前の一条院——一条天皇。寛和二年(九八六)七月二十二日に即位の儀式が行われた。
- 3 御装束す——式場となる大極殿を即位の儀式にふさわしく飾りつけること。
- 4 高御座——天皇が座る玉座。
- 5 行事——即位の儀式の責任者。
- 6 大入道殿——藤原兼家。一条天皇の母方の祖父にあたる。
- 7 なにがしのぬし——氏名不詳の人物。語り手によって匿名にされている。
- 8 心肝——思慮。考え。
- 9 かの殿——即位の儀式の責任者である「行事」のこと。
- 10 大宮——藤原彰子。一条天皇の中宮で、後一条天皇や後朱雀天皇の母。
- 11 北の政所——源倫子。夫は藤原道長。道長との間に彰子を産む。
- 12 春日——春日社。藤原氏の氏神をまつる。
- 13 吹き纏ひて——吹き巻きあげて、の意。
- 14 源氏の氏寺——東大寺のこと。東大寺の大仏建立に際し、源氏の氏神である八幡神が協力の託宣を出したとされており、それを踏まえての呼称。

問一 傍線部①「やみにしは」、傍線部⑥「見えさせたまはぬに」について、助動詞をすべて四角で囲い、解答例にならってそれぞれの文法的意味と活用形を答えなさい。

【解答例】

見

つ

け

た

り

(完了・連用形)

け

る

(過去・連体形)

問二 傍線部②「あさましく」、⑤「大殿籠り入りたり」、⑦「うちおどろかせたまふさまにて」をそれぞれ現代語訳しなさい。

問三 傍線部③「かかること」の内容を答えなさい。

問四 傍線部④「さぶらふ」、⑨「たてまつら」、⑩「まゐら」について、それぞれ(1)敬語の種類と(2)敬意の対象について答えなさい。なお、敬意の対象については本文中の語で答えなさい。

問五 行事は、なぜ傍線部⑧「聞かせたまはぬやうにてあらむと、思し召しけるにこそ」と思ったのか。行事の推測した大入道殿の心中について、五十字以上、六十字以内で説明しなさい。

問六 傍線部⑪「かやうに怪だちて見たまへ聞こゆること」とは、具体的にどのような出来事を指しているか。説明しなさい。

問七 怪異現象に対する語り手の考えについて、五十字以上、六十字以内で説明しなさい。

(白紙ページ)

## 三

次の文章は、清代の学者・顧炎武が友人にあてて送った手紙である。顧炎武は『論語』のことを用いながら、人物批評のあり方について説いている。これを読んで、後の問いに答えなさい。なお、設問の都合で返り点・送り仮名を省いたところがある。(配点50)

毎<sup>①</sup>接<sup>②</sup>高<sup>③</sup>談<sup>④</sup>、無<sup>⑤</sup>非<sup>⑥</sup>方<sup>⑦</sup>人<sup>⑧</sup>之<sup>⑨</sup>論<sup>⑩</sup>。子<sup>⑪</sup>曰<sup>⑫</sup>「三<sup>⑬</sup>人行<sup>⑭</sup>、必<sup>⑮</sup>有<sup>⑯</sup>我<sup>⑰</sup>師<sup>⑱</sup>焉<sup>⑲</sup>、挾<sup>⑳</sup>其<sup>㉑</sup>善<sup>㉒</sup>者<sup>㉓</sup>而<sup>㉔</sup>從<sup>㉕</sup>之<sup>㉖</sup>、

其<sup>㉗</sup>不<sup>㉘</sup>善<sup>㉙</sup>者<sup>㉚</sup>而<sup>㉛</sup>改<sup>㉜</sup>之<sup>㉝</sup>。」執<sup>㉞</sup>事<sup>㉟</sup>之<sup>㊱</sup>意<sup>㊲</sup>其<sup>㊳</sup>在<sup>㊴</sup>於<sup>㊵</sup>斯<sup>㊶</sup>乎<sup>㊷</sup>。然<sup>㊸</sup>而<sup>㊹</sup>子<sup>㊺</sup>貢<sup>㊻</sup>方<sup>㊼</sup>人<sup>㊽</sup>、子<sup>㊾</sup>曰<sup>㊿</sup>「賜<sup>㊽</sup>也<sup>㊾</sup>賢<sup>㊿</sup>

乎<sup>㊿</sup>哉<sup>㊽</sup>。夫<sup>㊾</sup>我<sup>㊿</sup>則<sup>㊽</sup>不<sup>㊾</sup>暇<sup>㊿</sup>。」是<sup>㊽</sup>則<sup>㊾</sup>聖<sup>㊿</sup>門<sup>㊽</sup>之<sup>㊾</sup>所<sup>㊿</sup>孳<sup>㊽</sup>孳<sup>㊾</sup>以<sup>㊿</sup>求<sup>㊽</sup>者<sup>㊾</sup>、不<sup>㊾</sup>徒<sup>㊿</sup>在<sup>㊽</sup>於<sup>㊾</sup>知<sup>㊿</sup>人<sup>㊽</sup>也<sup>㊾</sup>。論<sup>㊿</sup>

語<sup>㊿</sup>二<sup>㊽</sup>十<sup>㊾</sup>篇<sup>㊿</sup>、惟<sup>㊽</sup>公<sup>㊾</sup>治<sup>㊿</sup>長<sup>㊽</sup>一<sup>㊾</sup>篇<sup>㊿</sup>多<sup>㊽</sup>論<sup>㊾</sup>古<sup>㊿</sup>今<sup>㊽</sup>人<sup>㊾</sup>物<sup>㊿</sup>、而<sup>㊽</sup>終<sup>㊾</sup>之<sup>㊿</sup>曰<sup>㊽</sup>「已<sup>㊿</sup>矣<sup>㊽</sup>乎<sup>㊾</sup>。吾<sup>㊿</sup>未<sup>㊽</sup>見<sup>㊾</sup>下<sup>㊿</sup>能<sup>㊽</sup>見<sup>㊾</sup>二<sup>㊿</sup>

其<sup>㊿</sup>過<sup>㊽</sup>而<sup>㊾</sup>內<sup>㊿</sup>自<sup>㊽</sup>訟<sup>㊾</sup>者<sup>㊿</sup>也<sup>㊽</sup>。」又<sup>㊽</sup>曰<sup>㊿</sup>「十<sup>㊽</sup>室<sup>㊾</sup>之<sup>㊿</sup>邑<sup>㊽</sup>、必<sup>㊾</sup>有<sup>㊿</sup>忠<sup>㊽</sup>信<sup>㊾</sup>如<sup>㊿</sup>丘<sup>㊽</sup>者<sup>㊾</sup>焉<sup>㊿</sup>、不<sup>㊾</sup>如<sup>㊿</sup>丘<sup>㊽</sup>之<sup>㊾</sup>好<sup>㊿</sup>學<sup>㊽</sup>

也<sup>㊿</sup>。」是<sup>㊽</sup>則<sup>㊾</sup>論<sup>㊿</sup>人<sup>㊽</sup>物<sup>㊿</sup>者<sup>㊽</sup>、所<sup>㊿</sup>以<sup>㊽</sup>為<sup>㊾</sup>內<sup>㊿</sup>自<sup>㊽</sup>訟<sup>㊾</sup>之<sup>㊿</sup>地<sup>㊽</sup>。而<sup>㊽</sup>非<sup>㊾</sup>好<sup>㊿</sup>學<sup>㊽</sup>之<sup>㊿</sup>深<sup>㊽</sup>、則<sup>㊾</sup>不<sup>㊾</sup>能<sup>㊿</sup>見<sup>㊾</sup>己<sup>㊿</sup>之<sup>㊽</sup>

過<sup>㊿</sup>。雖<sup>㊽</sup>欲<sup>㊾</sup>改<sup>㊿</sup>不<sup>㊾</sup>善<sup>㊿</sup>以<sup>㊿</sup>遷<sup>㊽</sup>於<sup>㊾</sup>善<sup>㊿</sup>、而<sup>㊽</sup>其<sup>㊿</sup>道<sup>㊽</sup>無<sup>㊾</sup>從<sup>㊿</sup>也<sup>㊽</sup>。記<sup>㊽</sup>此<sup>㊿</sup>二<sup>㊽</sup>章<sup>㊿</sup>於<sup>㊾</sup>末<sup>㊿</sup>、其<sup>㊿</sup>用<sup>㊽</sup>意<sup>㊾</sup>當<sup>㊿</sup>亦<sup>㊽</sup>有<sup>㊾</sup>

在<sup>㊿</sup>、願<sup>㊽</sup>與<sup>㊾</sup>執<sup>㊿</sup>事<sup>㊽</sup>詳<sup>㊾</sup>之<sup>㊿</sup>。

(顧炎武『亭林文集』より)

(注)

- 1 高談——あなたのおっしゃること。
- 2 方人——人物の長所と短所を批評すること。
- 3 執事——相手に対する敬称。「あなた」の意。
- 4 子貢——孔子の門人。姓は端木、名は賜、子貢は字。
- 5 賜——子貢を指す。
- 6 聖門——聖人の門派。孔子の学派のこと。
- 7 孳孳——勤勉なさま。
- 8 公冶長——『論語』の篇名。
- 9 自訟——自らを責める。
- 10 十室之邑——十軒ほどの規模しかない小さな村里。
- 11 丘——孔子の名。ここでは孔子が自分のことを言っている。
- 12 地——ここでは「基礎」の意。
- 13 其道無從也——その方法がないこと。
- 14 記此二章於末——この文中に引用される「已矣乎」と「十室之邑」の二章が公冶長篇の最後に記されていることを指す。

問一 波線部A～Dを訓読し、送り仮名があれば、それも含めてひらがなで書きなさい。解答は現代仮名遣いでよい。

問二 傍線部①を漢字仮名交じり文で書き下しなさい。

問三 傍線部②の「過」はどのような意味か。次のア～オの中から適切なものを一つ選び、記号で答えなさい。

ア 過去

イ 超過

ウ 過失

エ 通過

オ 過激

問四 傍線部③を現代日本語訳しなさい。

問五 傍線部④は「不善を改めて以て善に遷らんと欲すと雖も」と訓読する。これに従って返り点を施しなさい。

問六 顧炎武は、人物批評のあり方について、この手紙の中でどのように論じているか。その内容を、七十字以内で述べなさい。